

3. 障害児の育児支援という考え方から対応する

おがた小児歯科（福岡市）

道脇 信恵



略歴

平成2年 福岡歯科衛生専門学校入学

平成4年 福岡歯科衛生専門学校卒業

平成4年 医療法人発達歯科会

おがた小児歯科医院 就職

現在に至る

障害児を持つ保護者は、わが子の精神の発達や機能の発達のための療育に時間をとられ、歯科医療を通して歯科保健の大切さを知る機会が少ない。また、障害者歯科の専門的情報の提供を知る機会も少ないことが現状である。一方で障害者歯科の特異性は、患者さんの持つ機能不全や能力障害が直接歯科保健の状態に影響を及ぼし、しかし保護者がその認識を十分に持たない場合があるところにある。さらに、障害に対する受容の進み方から、必要な歯科保健管理が困難であることもある。

私たちの過去の調査で、歯科保健指導については、障害児の保護者は細かな指導を受けるよりもよりも支援の方がありがたいと述べていた。また、育児の中では歯の萌出や食べる機能の発達は他の“あるく”、“話す”など比べて有意に喜びが小さいという調査結果からは、一般に口腔への関心が低いと考えられた。

このようなことから障害児の保護者が子どもの口への関心、知識を得るには、たとえば母親教室による集団指導や、細菌検査を用いたカリエスリスクの評価以前に、医療者側の“支援”の考えに立った接し方が必要と考えられる。“支援”とは、その人が人としてその人らしいくあるための寄り添いと支えであり、指導や援助とは異なる。そこで、初診時の医療面接を通し、保護者が抱えているさまざまな葛藤、不安、喜びを共有し、歯科医院全体に障害児を育てる保護者を支援するという態度が必要である。そして信頼関係を得、こどもの発達と保護者の状況に合わせて、障害と歯科保健の関係について個別にチェアサイドで継続的に情報提供を行い、保護者の認識を高めている。